

令和6年度 東北ブロックPDCAサイクル

施設名	課題	目標	目標達成の検証方法	結果	改善
東北大学病院	診療体制の充実	小児・AYAがん患者における移行期医療体制について、病院全体および宮城県と具体的な内容を議論しながら、全体の体制作りを進める。	病院全体の移行期医療ワーキンググループおよび宮城県との連携の下、小児科と成人科の連携や移行体制の構築が進み、体制が明文化がされたかを検証する。	病院全体の移行期WGが発足し、具体的な体制が議論されている。	今後、具体的な体制作りを継続する必要がある。また、宮城県立こども病院との連携を強化する必要がある。
	人材育成の向上	多職種スタッフの講習受講を進める。東北ブロック小児がん連携病院合同カンファレンスと小児がん相談支援部会、各種研修会を主催し、人材育成の機会提供に努める。	講習受講状況をまとめる。東北ブロック小児がん連携病院合同カンファレンスや小児がん相談支援部会、各研修会の内容についてアンケートを行い、その満足度を検証する。	全国レベルの講習受講は毎回参加している。東北ブロック内の相談支援に関する講習会を企画している。	東北ブロック内の相談支援に関する講習会の参加率を増加させる工夫が必要である。
	小児がん相談支援の改善	AYAがんワーキンググループとAYAがん相談室が開設されたため、その相談件数を確保する。高校生学習支援の高校間格差を少なくする策を講じる。	小児・AYAがん相談件数をまとめる。教育行政と連携し、高校間格差を少なくする方策を講じ、遠隔授業までの日数・単位取得状況・患者満足度を検証する。	相談件数は昨年同様一定した件数で継続されている。教育行政との連絡会議を2回開催し、高校教師向けの動画を作成中である。	教育行政との連携を継続し、高校間格差を少なくする方策を進めて行く必要がある。
弘前大学医学部附属病院	診療体制の充実	1. 妊孕性保存支援の体制強化：初期治療段階での情報提供を徹底する 2. オンライン研修会の充実：Webカンファレンスの活用により、地域の連携病院との知識共有を強化し、東北全域で均一かつ質の高い診療体制を維持する。	実施検査数を計測する	安定して妊孕性保存外来受診が定着してきている。	地域の連携病院とのカンファレンス活用は今後の課題である。
	人材育成の向上	1. AYA世代関連、長期FU関連の研修会に参加 2. 院内多職種カンファレンスに参加	参加スタッフ数を計測する	定期的にも多職種カンファレンスは開催されている。	AYA世代関連、長期FU関連について、より丁寧な周知など工夫したい。
	小児がん相談支援の改善	1. 院内がんサロン利用を拡充 2. 高校生の学習支援体制の強化：学内復学支援体制を各高校と連携して整備する	利用者数を計測する、開催された支援会議を計測する	学習支援体制も、妊孕性温存外来と共に実施件数が増加している。	院内がんサロンは、場所の移転などあり周知を徹底し、利用拡充を図りたい。
青森県立中央病院	診療体制の充実	「AYA世代の生殖機能保存の支援体制の構築」→当院血液内科が行う支援体制の構築への協力を行う。	青森県がん診療連携協議会の協力を得て、検証を行う。	生殖医療保存に限らず、AYA世代がん患者の困りごとをスクリーニング等を行うため、がん相談員が初回入院時に訪問する取組が継続されている。	院内多職種に対するフィードバックを行い、体制強化へつなげる。
	人材育成の向上	「多職種スタッフの配置」→相談支援に携わる人材を中心に、病院全体として、小児がんに関わる多職種に人材を育成する。	同上	国立がん研究センターが主催するがん相談支援センター相談員研修基礎研修修了者を増やすことができた。	LCASなど専門的な研修修了者を増やす。
	小児がん相談支援の改善	「高校生の復学支援の構築」→がん相談支援センターと連携し、復学支援を行える体制を整備する。	同上	病弱特別支援学校と連携した支援体制が継続されているが、対象者は多くはない。	更なる体制強化が求められる。
秋田大学医学部附属病院	診療体制の充実	妊孕性温存に關しての説明内容の充実を図る。	説明の実施状況の確認。	1名実施も希望無し	新患発生時にもれなく行う
	人材育成の向上	小児血液・がん専門医、小児がん看護学会認定看護師の確保。	各試験の結果確認。	受験者なし	受験希望者のサポート
	小児がん相談支援の改善	高校生の復学支援や院内学級入級基準を満たさない児童の遠隔教育体制を整備する。	遠隔授業を受けた患者からの感想や評価。	該当者なし	小中学生には対面での支援が拡充しており、必ずしも遠隔を要さなくなってきた。
中通総合病院	診療体制の充実	診療体制の充実	AYA世代の長期フォローを充実させる(サマリー作成、病状説明)	順調に経過	継続
	人材育成の向上	人材育成の向上	他職種の講習受講ならびに相談支援部会への参加を促す	会議に事務も参加あり	あり
	小児がん相談支援の改善	小児がん相談支援の改善	患者会活動を継続する(ニーズを拾い上げる)	継続	不変
岩手医科大学附属医院	診療体制の充実	造血幹細胞移植後予防接種について小児科の予防接種外来担当医と連携して地域への情報提供を行う	対象患者の経過を確認。	共有を開始することが出来た	市町村毎の格差がある
	人材育成の向上	小児血液がん専門医、血液専門医育成に努める。	資格取得者の確認。	血液専門医の専攻医1名が研修を開始した	コンスタントに増加するよう努める
	小児がん相談支援の改善	高校生の学習支援、復学支援を強化する。	対象患者の経過を確認。	文部科学省の会議に参加、学校と病院間での情報共有は出来た	個別の対応が続いており、血液内科とも共有が必要
山形大学医学部附属病院	診療体制の充実	「他科・多職種の症例カンファレンス参加」 AYA世代の血液腫瘍・腫瘍性疾患について：血液内科・外科系診療科との情報交換、連携を進める。Transitionについて、成人診療科との連携を図る。 重粒子線治療について：対象症例が院内発生およびご紹介いただいた際に迅速に対応できるように、放射線治療科と連携を取っていく。	他診療科と連携できた症例を確認する。 Transitionが可能そうなモデルケースとなる例を決めてtransitionを試みて、経過を評価する。	20代女性MDS(無治療経過観察中)を血液内科へ紹介することになった。他院ではあるが17歳男児血友病Aを血液内科へ紹介した。他院および当院放射線治療科から、重粒子線治療のAYA世代女性について、連携依頼があり対応した。	他科・他診療部署との連携がスムーズにできている。
	人材育成の向上	「学会・研究会への参加」 全国学会、地方会などの関連学会に積極的に演題を提出する。	学会・地方会の発表件数の確認	小児科学会山形地方会2件 日本血液学会1件 日本小児血液がん学会1件 東北小児がん1件 他研究会4件 計9件	学会研究会へは例年通り参加できていた。
	小児がん相談支援の改善	「高校生の学習支援の見直し」 高校生の入院時、学習環境・単位取得の要件などの確認を行う。	各症例について、実際に入院中の学習状況、単位取得状況を個別に確認する。	高校生の入院2名については、支給されているパソコンを使った授業の視聴、単位の取得はできていなかった。	患者さんそれぞれの病状、希望に沿った部分や、各高校の状況によるところもあるため、リモート授業での単位取得の可能性を踏まえつつ関わっていく。
宮城県立こども病院	診療体制の充実	・現在東北地区で行われている、Webカンファレンスに積極的に参加する ・各種学会に専門医・指導医取得をすすめていく	カンファレンス出席数などの確認など	東北地区のWebカンファレンスには定期的に参加し、最新の診療情報の収集と共有を行った。 名がん治療専門医取得予定	・引き続き合同カンファレンスに積極的に参加し、診療情報の共有と連携強化を図る ・各医師が資格取得に向けた具体的なプランを立て、目標達成を目指す
	人材育成の向上	小児がん関連の研修に多職種での参加を促していく	研修への参加者数をカウントする。	一部職種の参加率には依然として偏りがあり、全体として参加人数は少ない	各職種、個人個人へ連絡が行き届いていない可能性があるため、院内の情報伝達方法を改善し、より効果的な連絡手段の確立を図る。
	小児がん相談支援の改善	(1)がん相談支援センター相談員研修を受講し、小児がん相談支援の内容の充実を図る。 (2)病院HPやSNSを活用した小児がん相談についての認知度を向上	(1)受講歴の確認	・相談支援の問い合わせ件数は増加しておらず、認知度向上が必要 ・臨床心理士主催の患者家族向けサロン事業を開始し、患者家族間の交流が深まり、情報交換や精神的サポートの場として一定の成果が得られた。参加者からは好意的なフィードバックがあり、効果が実感されている。	・小児がん相談支援について患者家族へ情報を伝える手段の再考 ・患者家族サロンの定期的な開催、参加しやすい環境作り。
福島県立医科大学附属医院	人材育成の向上	tumor boardを通じた多職種と連携をより強化し、各がん種に対応できる診療体制を構築する。サルコマセンター構築によるAYA世代に肉腫治療の充実。南東北病院との連携による陽子線照射体制の充実。難治性白血病に対する造血細胞移植を継続して実施し小児がん治療成績の向上を目指す。小児AYAがん長期支援センターでは、地域の総合内科医ネットワークと連携し、小児がんサバイバーの健康管理体制を構築するモデルを作成する。治験への参加も積極的に行う。	小児がん診療患者数、肉腫の患者数、造血細胞移植の実施件数、陽子線治療を実施した患者数、治験参加数、セカンドオピニオン数などについて評価する。 AYAがん長期支援センターでは、地域の総合内科医ネットワークと連携し、小児がんサバイバーの健康管理体制を構築するモデル事業については、実際にそのモデルで診療した患者数を評価する。	令和6年度は退職者が2名おり、造血細胞移植の他院からの紹介を断らざるをえなかった。そのため、セカンドオピニオンも4件と少なかった。	働き方改革をすすめつつ、病棟の効率的な運用を図り、若い医師をリクルートしていきたい。長期フォローアップで地域の総合診療医との連携を円滑にするためにがんプロの枠組みを利用し、長期フォローアップのコースを設ける予定である。
	小児がん相談支援の改善	がんプロの枠組みの中で長期フォローアップ外来、移植後LT-FU外来に対応できる人材の育成。小児専門の造血細胞移植コーディネーターの育成。CLICを通じた緩和ケア研修。小児血液がん専門医の養成。遺伝、ゲノム医療にも対応できる人材の育成。医師以外の医療スタッフの研修の機会の確保。造血細胞移植に精通した医師、看護師の育成。造血細胞移植認定医の取得。	地域における研究会、講演会、セミナーなどの開催、学術集会などへの積極的参加と発表を行う。多職種でのケースカンファレンスの定期的開催。長期フォローアップ研修会への参加。小児AYAがん長期支援センターの定期的連絡会議を開催。エキスパートパネルへの参加。	研修会やセミナーなどへの参加は時間の確保が難しくなかなか参加が困難な状況がある。リモネードスタンドからの寄付もいただいたが、一般社会への啓発も重要な課題である。	人員の確保・ゲノム医療への対応。一般の人への小児がんについての啓発活動。SNSなどでの発信。
	小児がん相談支援の改善	生殖機能温存(精子、卵子保存)に関する相談員の育成。AYAがん長期支援センターの相談体制を充実させ、AYA世代からの相談に対応できるようにする。ファミリーハウスでの相談体制も整備し、Zoomでの相談なども考慮する。セカンドオピニオンの体制整備。本年より新たに、がんの子供を守る会のサポートで、小児がんサバイバー同士で話し合う会を開催した。	相談件数、相談内容を分析し、実際に困っていることが何か、それに対してどのような支援が可能かを検討する。小児がんサバイバー同士の横のつながりを深めるため、単なる講演会ではなく、患者同士が主体的に話し合う会を開催し、参加者数やアンケートなどで参加者の意見を集め評価する。	相談事業は小児AYAがん長期支援センターなどでの課題・問題点の抽出により適切に実施されている。患者同士が話し合う会も開催し好評であった。	相談の研修、長期フォローアップの研修を受けの人を増やす。病棟のスタッフにも退院後の患者の状態をフィードバックする。